

「ちび」の本質

中 島 洋 一

「さび」なる理念は歌論並びに連歌論に於ても十分に認められ、殊に連歌論に於ては最高の理念の一つにまで至り得て居るのであり、其処に極めて深い本質的な美的世界が見られるのであるが、しかしこの理念が真に完成し、我が国の文芸理念の最高位を占めるに至つたのは近世に於ける蕉風俳諧の成立後と云はねばならない。

蕉風俳論に於ける「さび」の理念に就ては、既に多くの先学によつて論ぜられてゐるのであり、それらを考察しながら、一応蕉風の「さび」なる世界を結論付けて見るならば左記の如く云ひ得るであらう。

先づ内的色調としては寂しさ、静けさ等を含む閑寂なる性格がやはり認められよう。そしてその姿、或は現れ方としては、沁やかな地味な潤ひ、雰囲気、匂ひ、物のけはひ、全体に瀟漫された気分等と云はれる如く、気分象徴的であり、本質論的には「うちに根ざして、外にあらはるるもの也」と云ふ、これらの閑寂な句を生む根元的なところにあるものであり、ものの本質的生命に迫り、永遠的なものを汲取り、喜びや悲しみがあるじとする心境である。

とも云へよう。その発想の上から云へば、造化に随順すること、自然を己が生命とし、私意私情を去つて自然の心になり切ることとも云はれ、凝視と物我一如がその方法であるとされてゐる。又その思想的背景としてはやはり、無常思想のそれが指摘されるのである。そして最後に、この「さび」の構造としては、表面が消極で力強い内面を有するとか、或は通俗と高貴、地味と花やか、伝統と否定等の二重性に於て捉へられてゐるのである。

此れらの中、此処では最近特に問題にされてゐる「さび」の構造論に關して考察したいと思ふ。「さび」なる理念が二重性を持つものである事に関しては、既に久松博士も「『寂び』は『閑寂』に言換へてもよい」と述べられた後、

(1) 閑寂は力とか花やかといふ外に現れようとする感情を内に抑制して内部に於て活かせるのであると思ふ。即ち表面から見ると消極的な沈んだ無力であるやうに見えて、力強い内部生命が躍動する境地であると思ふ。⁽⁹⁾

(2) 閑寂は大きく強い所から生ずる美を、小さく弱い所から生ずる美のやうにしようとする事によつて生ずる美である。即ち雄大と優美とを融合した所より生ずる複雑した情趣であると思ふ。かくして閑寂は雄大に伴ふ粗雑から離れて細い所はあるが、優美のやうに弱くは深くはなるのである。

等の如く論ぜられ、対立する二つの契機を認め、それを止揚したものと捉へて居られるのである。又、頼原教授は、「俳諧に於ける通俗卑近性の華やかさ、をかしさを、その姿・言葉から心にまで深めたのが即ち芭蕉の寂であつた」⁽⁹⁾の如く芭蕉の寂の理念の中に通俗卑近の要素のあることを指摘して居られるが、これは伝統的な歌論、連歌論の「さび」の理念に対立する通俗卑近の要素の指摘であり、対立を契機とした二重構造の本質的要素を説明したものと云へよう。この点に關しては同じく、太田水穂氏も「芭蕉は、嘗て一たび反対の形に置かれた堂上風の新古今集的寂びと、貞門檀林の世俗的洒脱とを一致せしめ、ここに新なる体形として正風の寂びを作り出したのである。彼の寂びが極めて高きにほびを帯びながら、同時に現実の親しみとくつろぎとを有するのは此のためである」⁽¹⁰⁾の如くこれを説いてゐるのである。しかしこれらの人々に共通的な性格として、何孰れもその対立を契機とする二重性は一応指摘しなが

らも、それらの調和し合ふ面のみを重視し、その否定し合ふ面に就ては、それ程深く究明されては居なかつた点、及びそれらの論が俳論それ自体の分析によると云ふより、蕉風俳諧全体からの帰結として見出されて居た点等が指摘し得る様に思はれるのである。

次いで「さび」の構造を論じて、最近最も強くその二重構造を唱へる者に西尾氏がある。氏は、

われわれの前にあり、したがってわれわれのうちにある「さび」は、「渋い趣味だ」とか、「くすんだ柄だ」とか、「いぶし銀だ」とか、「うら鎔だ」とかいうような云いかたで表現されているような美であつて、「一見、いかにも「地味」ではあるが、「地味」だけではない。そこに、かならず、時には「花やかさ」が、時には「高貴さ」が、時には「精巧さ」が、それを裏づけているというような、含蓄のある在りかたであり、その表面（外）と裏面（内）とが、否定的関係にある構造体であるといつてよいであらう。このようにして、「さび」は、否定的契機の対立によつて形成される止揚としての、いわば弁証法的発展の成果であるとしなくてはならぬ構造体である。⁵³

と論じ、又更に、

「さび」を、その史的展開から、古代貴族的な優雅・華麗（有）と、その否定として頭を拾げた、鎌倉武士的な質素・簡朴（無）との対立に導かれた、この両契機の止揚的發展であるとし、室町期の能芸美は、「無」に裏打ちされた「有」であり、利休の「わび」は、「有」に裏打ちされた、「無」であるという考察を試みたが、いまはそれを承けて、芭蕉の俳諧においては、「有」に裏打ちされた「無」である利休の「わび」の継承を主軸としながらも、さらに、「無」に裏打ちされた「有」をも生かし得た自在境に達したところに、その完成的意義があるとしてきた。

とも論じて居られる。この論は今迄の調和相に重点を置いた考へ方に対して、その対立を、否定性を特に強調した所に新しさと意義とを認め得るのであるが、しかし氏の論拠の前者は現代の「さび」の理念を基にして居るのであり、これには「粹」などの理念の混入も考へられ、蕉風俳論の「さび」との間には多少の差異が存すると考へられるのである。又後者の場合は一つの文芸史観からなされて居り、秀れた洞察ではあるが、此処では歌論、連歌論に於ける「さび」への考慮が見られず、又蕉風俳論の「さび」に就てよりも、芭蕉俳諧の世界が即「さび」であるとの前提の下に、

芭蕉俳諧からの帰結を以て直に「さび」の理念付けをしてゐる点で、広義に於ける一般的「さび」の理念を考察し得ても、俳論に於ける「さび」なる本質はそれによつては尚十分には論証し得ない様に思はれるのである。

- 註(1) 拙稿「歌論・連歌論の『さび』」人文論究 第十二卷 第三号
(2) 久松潜一著 日本文学評論史、近世最近世篇 一一三〇頁
(3) 小宮豊隆著 芭蕉の研究 一一七頁
(4) 麻生磯次著「芭蕉俳諧について」国文学 第二卷 第四号
(5) 実方 清著 日本文芸理論 風姿論
(6) 麻生磯次著「芭蕉俳諧について」国文学 第二卷 第四号
(7) 久松潜一著 日本文学評論史、近世最近世篇 一一三一頁
(8) // //
(9) 額原退蔵著 俳諧精神の探究 六九頁
(10) 太田水穂著 芭蕉俳諧の根本問題 一九一頁
(11) 西尾 実著 日本文芸史における中世的なもの 六六頁
// // // 二二五頁

一一

これらの論に対して正しく蕉風俳論の「さび」なる理念を前に据ゑて、この否定を契機とした「さび」の二重構造を説明せんとした者に井本教授と、次いでその論を更に発展させた栗山教授とが居られる。井本教授は、去来抄に「先師日、さび色よくあらはれたり」と記されてゐる「花守や白きかしらをつきあはせ」の句を説いて

思ふに、この句は花の句である。花は従来の和歌的伝統から云へば当然桜の花であり、しかも爛漫と咲きにほふ華やかな光景でなければならぬ。しかるにこの句は花の句であり乍ら、従来の和歌的伝統から離れて、むしろ和歌的伝統に反撥して、白髪の花

守が二人頭をつきあはせてゐるといふしめつばい光景である。だが、それなら従来の伝統の花が全然ないかといふと、決してさうではなく、爛漫たる桜花はどうしてもこの白髪の人たちの背景になければならない。従来の中世的伝統としての華やかな美しい、爛漫たる桜花、しかもそれを詠まないで、むしろそれと正反対であるやうな契機を捉へようとする方法、それが「さび色よくあらはれたり」の意味ではあるまいか。さうして、和歌的な伝統を一応生かしながら直ちにそれを否定して行く、或は否定しながらどこかで生かして行く、といった方法が、蕉風俳諧の発想の根本にあると考へてよいのではあるまいか。⁽⁴⁾

と述べて居り、此処には直接「さび」の、否定を契機とした二重構造の言葉は見えないが、その意図は十分に知られる所である。これを受けて更に明確にし、否定を契機とした二重構造の言葉を用いたのは栗山教授である。氏はその著「俳句批判」に於て『「さび」「さぶ」は、その本情からいつて『変質』というほどの意味に解してよい』とし、『うま人さびて』は、たゞ人が貴人らしくなること。『神さぶる』は、神でもないものが、莊嚴であるため神性をおびて見えること、『うらさぶ』は、これまでの楽しかった心が楽しくなくなること。』等の例を挙げ、俳論に於ては「花守や」の句を

「花守」という語によつて聯想される華麗な情緒が、「白きかしらをつきあはせ」ることによつて変質されてくる。一度は脳裏に描かれた華麗な聯想もたちまち打ち消されて、別趣の沈静な姿が浮き出してくる。しかも、この沈静は單なる華麗の否定ではなく、華麗のイメージを底にたたえもつ沈静である。華麗な地色の上に塗られた沈静の色であつてみれば、もはや單純な沈静でもなく、まして華麗そのものでもない。いわば否定の否定という二重性が、この変質を特徴づけていることになる。このような質的転換の二重の落差にふかぶかとしたリアリティが刻印されている。それを指して、芭蕉は「さび色」といつたのであろう。⁽⁵⁾

の如く論じて居られる。今この氏の「さび」の語源に關しての認識、「神さぶる」も「鏝る」も「うらさぶ」も皆同一の語源にして見ることに對しても、かなり多くの問題が存すると思はれるが、それは別にしても、蕉風俳論の「さび」の理念に直接強く影響を与へてゐると考へられる歌論・連歌論の「さび」に對する考慮が全く払はれて居らず、

遙かに離れた万葉の例から直ちに伴論の「さび」の理念へ結び付けようとする所には重大な問題が存する様に思はれる。

「さび」なる理念が常に否定を契機とした二重構造を持つものであり、それが「さび」に就ての本質的な規定であるか否かに關しては、出来るだけ次の二点に沿つて考察されるべきであらう。即ち第一には、「さび」の用例中、否定を契機とした二重構造としてどうしても説明されねばならないものがあるか、否か、第二には「さび」の用例中逆はこの二重構造ではどうしても説明され得ない場合があるか、否かである。先づ最初の問題に就て考へるに、確かにこの否定を契機とした二重構造論で考へれば、相當うまく説明出来る例句も少くない。而しこれを論ずる諸氏が挙げる論拠は皆その例句であり、それをどの様に説明するかであつて、芭蕉なり、或はその弟子達が「さび」をその様に解明したと云ふ説明的字句は殆どない。云はばその様にも解明され得る。乃至はその様に解明した方がよりよく説明出来ると云ふ第二義的な規定の仕方しか出来ないと思はれる。つまり第一の設問に於けるどうしてもそれではなければ説明されない、それ以外では説明し得ないと云ふ事にはならないのである。

では具体的に「花守や」の句に就てどの様に考へるか、確に否定を契機とした二重構造論による井本、栗山両教授の解明には深いものが存する。しかし栗山氏の言葉で云へば「いわば否定の否定という二重性が、この変質を特徴づけていることになる。このような質的轉換の二重の落差に、ふかぶかとしたリアリティが刻印されている。それを指して芭蕉は『さび色』といったのであらう。」の中、「さび」の本質はそのふかぶかとしたリアリティにあるのであつて、否定の否定といふ二重性とか、その変質とかに「さび」の特質があるのではないと考へられるのである。即ちこの「花守や」の句に於ては爛漫と咲き乱れた、美しく華やかなる桜花に包まれた場所でありながらも、人生の晩年に立つた花守が白髪を突き合せながら、何かひそくと語り合つてゐる。その叙陽の、深い人生の根元的なあはれさの中

にさびが存するのではあるまいか、去来抄にも「たとへば、老人の甲冑をたいし戰場に働き、錦繡をかざり御宴に侍りても、老の姿有るがごとし」と説かれて居る如く、それは云はば人間の本来的な、絶対的なものにぶち当りはね返されて来る一つの根元的な感情の中に見出されるものであり、其処には常に永遠的なものを遙に希求する心がその背後に存してゐるのである。それらは通常、あはれ乃至は閑寂の相貌を持つ事が多いであらう。かかる故にこそ去来も特に「閑寂なる句をいふにあらず」と注意せねばならなかつたのである。つまりこの言葉は、「さび」なる句はそれ程までも閑寂なる句に類似し、誤られ易かつた事を示してゐるとも云ひ得る。ではそれら兩者の差は何処に有るのであらうか、それには二つの点が指摘されよう。即ち一つは「さびは句の色なり」とある如く、それは淋しき、あはれき、静けきと云つたやうな、感覺的な生の情緒ではなく、もつと瀰漫された気分として、表現論的には気分象徴として存するのであり、第二には「うちに根ざして、外にあらはるゝもの」と云つた、最も深い人間の心の底からの発想であつて、目前の現象から引起された単なる淋しき、悲しき、静けきの世界ではないことが指摘されるのである。斯かる故にこそ「さび」は許六によつて「老の来るにしたがひ、さびしほりたる句、おのづからもとめずしていづべし」⁽⁵⁾とも云はれたりする。即ち老ゆる所、人間の体験の深まる所に、人間の本来的なもの、絶対的なもの、運命に対する認識が一層深まる故である。云はば其処に「死」が直面して来るからである。而、それが単なる現象としての老によつてはなし得ないこと勿論であり、其処に去来の説く如く、生得にあらざれば、求めずしては得られぬ所以が存するのである。又然もそれ故にこそ、許六の論ずる如く、「ことばをかざり、さびしほりを作りたらんは、真の俳諧にあるまじ」ともなるのである。単なる表現論的、構造の二重性であるならばどうして「蕉門の諸生千万人、老をもつて論ずるときは、先師にこたへるもの多し。いまださびしほりを得たるもの吾人をきかず」⁽⁶⁾と去来をして慨嘆せしめることが有らうか、斯かる心の絶対性に触れることを要求するものである故にこそ、芭蕉の如く己の一切の心を捨て、旅から旅

へと心を洗ふ必要があり、或は私心を去つて造化に没入し得なければならぬのであり、又その背後に仏教的無常思想が色濃く見られたりするのも一つに此処に由来すると云へるのである。斯かる故にこそ當時にあつては、殆ど芭蕉のみによつてしかなされ得ない世界であり、逆に其れに達し得た芭蕉にあつては去来によつて「師の句をうかゞふに、敵なるものあり、やさしきものあり、狂賢なるものあり、深遠なるものあり、平為成るものあり、健成るものあり、あわれなるもの有、ふつつかなる物有り、潤しき物あり、なほ千姿万態有りと云へども、さびしほりあらざる句はなし」⁽⁶⁾とも「なげてもころばしても、御句毎のさびてしほりの句たるを」とも云はれる如く、常に「さび」「しをり」が存し得たとも云へるのである。而して斯うした「さび」なる理念こそ、実は既に論じて来た如く俊成の「さび」のあの永遠性・郷愁性に通じ、心敬の「ひえさび」の徹した世界にも直結するものと云ふ事が出来よう。斯かる「自然と人事との究極的なものの中に徹し、すべてのものの生命に迫りその本質にふれたところに生れた根源的な姿相」⁽⁷⁾を「さび」であるとするならば、否定を契機とした二重構造性は、実はこの様な「さび」の本質を最も端的に表現し得る表現論上の、乃至は発想上の一つの場ではなからうか、「花守や」の句例で云へば、年老いた白頭の花守のみを出し、其処にかかる根元的なあはれの世界を出すことも可能であらうが、その背後にそれとは対比的な今を盛りに爛漫と咲き誇る桜花を描くことによつて、一層この様な「さび」の世界が浮彫にされ得たのではなからうか、しかし「さび」の二重構造論に見える如く、常に斯くの如き否定を契機とした二重性がなければ「さび」になり得ないのではなからう。これに就て井本氏は、「冬空のあれに成たる北風 旅の馳走に有明し置」の例句に於て、次の如く論じて居られる。

その句の「馳走」にさびがあるといふのは外に、寒い北風が吹き荒れてゐる旅泊の夜の旅人の寝さめ勝ちな荒涼たる心境に對し、明るいかも夜明けまで灯る有明しを点じて情景に暖かさを導き入れたといふ、その明暗の對立關係の中に生じたある情趣を指したものであらう。古来羈旅の歌は沢山詠まれてゐる。それはすべて旅は淋しい、悲しい、心細いといふ内容であり、帰するところ

故郷が偲ばれるといふ情趣である。もし凡兆の前句に対し、
冬空のあれに成たる北風　心細くも旅の夜を寝る
とでも（そんなつまらない句はないに決まつてゐるが、そんな内容の句をでも）詠んだとしたら、それは従来の和歌的、有心連歌的伝統から一步も出たものではない。……中略……それは寂しい句であらうが、さびではない。しかるに旅の馳走として有明しを出してくれたといふところには、外を吹く北風や旅の憂を慰めてくれる暖かき、明るさがある、旅のもてなしの懇さ（それは物質的に豪華なものではないにせよ）、亭主の心遣ひが、北風や旅愁の感傷に反撥してゐる。しかし、それなら旅の愁が全然ないかといへば、さうではない。やはり羈旅の歌の伝統―旅の淋しさ、悲しさといふものは背景に嚴としてゐるのである。それにも拘はらず、旅愁が、旅の感傷が一応否定される。さういふ暗い中の明るさ、淋しい中の暖かき、伝統的であると同時に伝統を否定する契機（6）の存在、そこに「馳走の字さび有」の言葉が記されると考へたいのである。

と述べて居られる。而しこの句の「さび」はその様に単に「暗い中の明るさ、淋しい中の暖かき、伝統的である」と同時に伝統を否定する契機（7）の存在」などの点に存するのであらうか、さうではなく、此処には前句の「冬空の」次第にあれ模様となり、激しく北風の吹き初める、さうした自然の厳しさの状況の下に、唯できへあはれに淋しい旅が一層心細く、不安であり、人間存在の小ささ、あはれさがひし／＼と感じられる時、物質的には殆ど感められる術もない荒れた小さい旅亭にあつて、亭主の心の籠つた有明しが、身にしみて嬉しいのである。それは確に人生の一断面であるのみならず、象徴たり得てゐるのでもある。即ちそんな頼りない、つまらない馳走にも身にしみて生きる心の燈火となる。さうした絶対的な心境の中に同じく人生の深い味を知り、生を凝視する心が存するのであり、其処にこそ「さび」が存するのではあるまいか。此処に見られる暗い中の明るさ、淋しい中の暖かき等の二重性は実はさうした生の根元的なものを見つめる契機、乃至はそれを強調する為の表現手法であると考へられるのではなからうか。従つて更に云へばこの様な否定を契機とした二重性がなくても十分「さび」たり得る筈である。井本氏の挙げた「心細くも旅の夜を寝る」の句が氏の云はれる様に「寂しい句」であつても「さび」たり得ないのは、それが人生の根元的なものに触れない、単なる旅の夜のはれさの情緒に止まつてゐるからに他ならないのである。俊成の判に於ける、或

は心敬の例に於ける「さび」は二重構造を有せずして然もかかる魂に触れる生の根元を見つめ、それを深く情趣化し得てゐる故に「さび」たり得てゐるのである。第二の設問に於ける「さび」の用例中、否定を契機とした二重構造ではどうしても説明され得ない場合が、即ちこれら俊成及び心敬等の「さび」の用例の中に見られるのである。今例を挙げれば

- 1、芦の葉も霜かれにけり難波かた玉もかり舟行かよふ見ゆ⁽⁹⁾
- 2、見渡せばおきの塩ちに雲とちて空か海かとわきそかねつる⁽¹⁰⁾
- 3、たどりつる道に今宵は更けにけり杉の梢に有明の月⁽¹¹⁾
- 4、なくや千鳥の水さむきこゑ 舟くたすさよふけ方に月出て⁽¹²⁾
- 5、月寒しとふらひきます友も哉 野寺のかねの遠き秋の夜⁽¹³⁾
- 6、ふげにけりをとせぬ月に水さひ江のたなゝし小舟ひとりなかれて⁽¹⁴⁾
- 7、行人さむみやま窓のうち 捨る身のよそに釣する舟を見て⁽¹⁵⁾

等、その一例に過ぎないが、(1)、(2)、(3)は俊成の「さび」と判のあるもの、(4)、(5)は救済の句であるが、宗砌がこれを「さびてあはれ」と批評したものの、(6)、(7)は心敬に於ける「さび」の用例である。

これらに対して、井本氏は、

連歌論でかういふ関係が深くつゝこんで考へられてゐるかといふと、それは疑問である。句評などで、「冷えやせた」句として挙げられてゐる句が、たゞ淋しい、冷いだけの句である場合も少くない。結局ここでは、さういふ考へ方が芽生えて来た時期と考へて置く位が適当なのであらう、まだ熟した考へ方にはなり得てゐないと見るべきであらう⁽¹⁶⁾

と述べて居られる。而し既に論述して来た如く、俊成いらしい心敬を通じて「さび」の理念も、二云はゆる中世全体を流れる美的理念たり得てゐるのであり、それが近世の蕉風俳論から割出された、否定を契機とした二重構造としての

「さび」の理念に適合しないからとて、それを否定し去るべきものではないであらう。確に蕉風の世界には、かうした二重性によつて解明される句が多く存するであらう。それは俳諧が伝統的な和歌的、連歌的な雅の世界を否定し、俗の世界に這入つた為であり、太田水穂氏も指摘して居られる様に、「彼の寂びが極めて高きにはひを帯びながら同時に現実の親しみとくつろぎとを有する」のも、その高悟帰俗の精神によるのであつて、否定を契機とした二重性は、俊成いらしい心敬を通して受継がれて来た「さび」なる美的理念の本質、乃至は本質的構造ではなく、云はば芭蕉俳諧の持つ特色に他ならないのではなからうか。斯かる芭蕉俳諧の性格を以て、既にそれ以前に確固として存し、強く芭蕉にまで影響を与へた「さび」を、如何に芭蕉が完成させたからとて、それで本質規定をし、それに当てはまらぬものを未熟として切棄て去ることは出来ない様に思ふのである。既に論じて来た如く、其処には歌論から連歌論を通して流れて来た一貫した性質、即ち物の本質に迫り、その中に流れる永遠的なものを見出さうとする作者の本質的な心がその中核に存するのであり、然もそれは何孰も象徴的手法によつて、現実的諸相を越えて人生の究極的な情趣世界を示現し得てゐるのであつて、此れを伝統的雅の中に見出すか、俗の中に見出すかの、或は二重の対比的手法を用ゐたか、一直線に切込まうとしたかの手法上の相違はあつても、その本質的な世界は常に一なるものであると見ることが出来るのである。

註(1) 井本農一著 俳文芸の論 一六頁

(2) 栗山理一著 俳句批判 一五頁

(3) 俳諧問答青根が峰

(4) // //

(5) // //

(6) 許六宛去来書簡 研究史大成 覆刻研究文献

- (7) 實方 清著 日本文芸理論 風姿論 三六八頁
- (8) 井本農一著 俳文芸の論 一七頁
- (9) 広田社歌合 海上眺望 十三番 右歌
- (10) // 十八番 左歌
- (11) 六百番歌合 恋一、尋恋、廿九番 左歌
- (12) 花能万賀喜 続群書類従 卷第四百九十五
- (13) // //
- (14) 百首和歌 ^寛政本^ 心敬集 論集 三三一頁
- (15) 芝草 ^文明本^ 心敬集 論集 四二頁
- (16) 井本農一著 俳文芸の論 二十五頁
- (17) 拙稿「歌論・連歌のさび」人文論究 第十二卷 第三号

三

而し俊成、心敬等を経て芭蕉に至った「さび」には既に考察して来た如く、その本質と目指す所は同じであつても、その表現され得た世界にはやはり、かなりの展開の跡が見られるのである。既に論じた如く自然に随順し、自然を己が生命とし、私意私情を去つて自然の心になり切ること、物我一如の境地の中に、或は雅に対して俗の中に「さび」を求めたこと等も芭蕉俳諧の特質であり、同時に蕉風俳論の「さび」の特質でもあるが、今これらと關聯して、その発想上から考察する時、これらの例のうちにもかなり顕著な展開が認められるのである。例へば俊成の判詞に見える「さび」なる世界の中には、

- 1、ね覚してものを悲しき昔見し人はこの世にあるそすくなき⁽¹⁾
- 2、蛭夜さむに秋のなるまゝによはるか声の遠さかり行⁽²⁾
- 3、昔おもふ高津の宮のあとふりて難波の声にかよふ松風⁽³⁾
- 4、うつつ山夕越え来れば雲降り袖ほしかねつあはれ此の旅⁽⁴⁾

等の如く、無論万葉的な感情の生々しさではなく、情趣化され、にじまされたものではあるが、尚主情的なあはれさの要素が多分に存して居り、詠者自身がそのあはれさの世界に、のめり込んで、そのあはれさを通して永遠的な世界を望み見んとしてゐるのである。例へば其処に詠ぜられた世界はすべて、詠者自身の投影であり、自然の景にしても如何に詠者の主観によつて彩られてゐることであらうか。其処に人生の究極的情趣の象徴にしても、又現実的諸相を越え、永遠的な世界を示現する情趣世界の象徴にしても、尚不十分なものが存することは否定し得ない所であらう。

これに対して救済の例句「なくや千鳥の水さむきこゑ　舟くだすきよふけ方に月出て」や「月寒しとふらひきます友も哉　野寺のかねの遠き秋の夜」等になると、俊成の場合の如き詠者の主情性は殆どなくなつてしまふのである。しかし其処には客観的な自然の景が詠ぜられてゐながらも、尚それは作者の心境と深く響き合つたものであり、逆に云へば深く人生をみつめて漸く至り得た自己の心情が客観的な敍景の中にも見事に象徴化されてゐるのであつて、やはり作者と句とは深く結びついてゐるのである。これが心敬の「さび」の用例「ふけにけりをとせぬ月に水さひ江のたなゝし小舟ひとりなかれて」や「行人さむみやま窓のうち　捨る身のよそに釣する舟を見て」等になると、その観照の鋭さが一段と深められ、無常感の深さが見られると共に、その発想態度に於て主観性がかなり切離され、自然の景を写すに当つても主情性で彩ることがなく、遙かに突き離れた見方に立つてゐると云へよう。しかし心敬のこれらの例に於ては、その様な発想を取りながらも、尚「たなゝし小舟ひとりなかれて」や「捨る身のよそに釣

する舟を見て」の如く、其の句に自己の姿が暗示されて居るのである。即ち主情的にはないが尙自己が句の中にその影を留めてゐる。それは靜かに、比較的客觀的に、しかし深い愛情を持つて眺められて居り、其処に深く沈潜された人生の究極的な情趣世界が見事に象徴化され得てゐるのである。

これらに對して蕉風俳論で云はれた「さび」の例句に於てはどうであらうか、蕉風に於て、一応信頼し得る「さび」の例句としては、

- (1) 花守や白きかしらをつきあはせ(去来抄)
- (2) 冬空のあれになりたる北風 旅の馳走に有明し置(三冊子)
- (3) 金屏の松の古きよふゆごもり(続出論)
- (4) 応々といへどたゞくや雪の門(許六宛去来書簡)⁽⁵⁾

などが考へられるが、これらを見る時、其処に倣成に於て見られた作者の主情性の色濃い投影、乃至はあはれなる世界への、のめり込みなど全くなく、且つ救済の句に於ける客觀的な発想の立場に立ちながらも、尚且つ作者の心境との直接的な響き合ひも、亦心敬に於ける如き句中の、自己の投影、暗示も見えない。少くとも、それらの作品は作者とは表面上全く切離された場でよみ出されてゐるのである。然もこれらの作品は深く觀照する時、何孰も深く人生をそれらの一面で鋭く捉へながら、同時に人生全体の象徴たり得てゐるのであり、作者自身の人生との直接的な結び付きに於てではなく、作者をも含めたすべての人生の究極的、本質的な情趣象徴たり得てゐるのであり、其れを通して永遠的な相貌を想起せしめてゐるのである。かかる作者との直接的な人生の結び付きによる人生の本質的情趣象徴から離れて、次第に客觀化され、突き離されながら、而も内面ではより深く自己をも含めた人生の深奥の情趣象徴たり得て行つた展開が、中世から近世への「さび」の理念の展開であると云へよう。これには和歌から連歌、そして俳

諧へと云ふジャンルの推移が有り、それ自体が既に内包してゐるものであるとも考へられるが、それは単に表現形体が異つたからと云ふことのみでなく、それにつれて発想態度の変化が興つて來てゐるのであり、時には逆にそれがジャンルの推移をも促すものとなつてゐるのであつて、これが斯く「さび」の美的理念に於ても亦見事に深められて行つたと云ふことが出来るのである。

以上によつて理解されるやうに井本、栗山両教授によつて説かれた「さび」の否定を契機とした二重構造論は、確に深い洞察を持つものではあるが、それは芭蕉俳諧乃至は蕉風俳論の「さび」の特質ではあり得ても、俊成・心敬・芭蕉と歴史を通して見られる「さび」なる理念の本質を規定づけるものではないと考へられるのである。「さび」なる理念は、その発想に於ても俊成から心敬・芭蕉へとより客観化への道をたどりながらも、その本質とする所は一であり、その最も中核をなすものは物の本質的生命に迫り、其処に人生の最も究極的、本質的なるものの象徴を見出し、單なる現象的な諸相を越えて、永遠的なる世界を展望するものであり、それは又深く内に根ざして外にあらはれるものであつて、常に気分としての象徴的表現に於て感得されるものと云ひ得るのである。

- 註(1) 広田社歌合 述懐 十三番 右歌
 (2) 御裳溜川歌合 廿一番 左歌
 (3) 慈鎮和尚自歌合 十禅師 十一番 左歌
 (4) 六百番歌合 冬、霽 廿四番 左歌
 (5) 研究史大成 覆刻研究文献